

『学習で大切なこと』

車の運転をしていて、迷いながらも目的地に到着した時、そこに至るまでの道順は頭の中に記憶として残ることは多いものです。次の機会にそこに行くためにはそれほど迷わずに着くことができたということがあります。

自分で運転をしていない時には、どこを通過してきたのかという記憶は極めて曖昧になります。なぜなら、自ら運転をしていない場合、ルートを記憶するという目的がないか、あったとしてもごく弱いものであるからです。したがって、どこをどう走っても注意を払うこともないし、景色や川の名前は覚えていてもドライブ中の重要な目印やどこの角を曲がったということには注意が向かないのです。しかし、自ら運転する場合は、何本目の道をどちらの方向に曲がったなどのルートを記憶できているのは、記憶することに強い目的意識を持っているからです。

記憶には、記憶することについての動機が重要な役割を果たし、十分に強い動機ないしは目的がなければ、あることを記憶しようとしても記憶はできないと言われています。

子どもたちの学習においても、学校で習ったことをすぐ忘れてしまう子どもたちは、気持ちの中に記憶することへの意欲がなかったり、試験にパスするためにだけ習うといった短絡的な動機でしかないということが言えます。つまり、学習を通して記憶に留めておくことの必要性や重要性を受け止めることができず、または、受け止めようとせずに学習に向かっても「やらされている」「しかたないから」という思いがわずかでも気持ちの中にあるとしたら真剣に覚えようとする意欲は湧き上がってこないものです。

授業を行う時に、初発の段階で子どもたちの動機づけをどう図るかということは、とても大切なことです。どうやってやる気を引き出すために、その学習の必要性や大切さとは何なのかということを子どもたちにわからせなくてはならないのです。

しかし、このことが学習の内容によっては、けっこう難しいことなのです。教師側、つまり大人の目線からいろいろと必要性を説いたりくどくどと話したとしても、子どもたちには、話の内容が難しかったり、説明が長すぎてその時点で焦点を絞ることができなくなったりなど、かえって逆効果という場合もあります。よく「子どもたちを授業にのせる」という表現の仕方をすることがありましたが、私が現役教師だった頃は、この子どもたちをのせるということが下手くそな教師でありました。したがって、授業を進めていくうちに、子どもたちのどんよりと曇った表情に頭を悩ましたものです。

ベテランの諸先輩たちの中には、実に子どもたちの動機づけ「子どもたちを授業にのせる」ことが巧みな先生方がおりました。そのような先生の授業を受ける子どもたちは、生き生きとした様子で学習に取り組み、授業の最初から終わりまでやる気がみなぎっているのです。先輩の授業を見せてもらい、真似をして授業をやってみるのですが、なかなか先輩と同じようにはいきません。子どもたちに「やるぞ!」という意欲を引き出させるということは、単に真似たからといってできるような生やさしいものではないのです。普段からしっかりと子どもたちの心をとらえておかななくてはならないのです。その点で授業が下手くそな私の場合は、日頃から子どもたちがどんなことを考えているのか、どんなことに興味や関心を持っているのか、どんな時に喜びを感じているのかなどに目を向けることが少なく、子ども理解ができていない教師だったと自省の念に駆られます。

学習することは、知識や技能を蓄えておこうとする目的を欠いてはなりません。ある特定の事柄を記憶するためには、どうして記憶しなければならないかをよく理解する必要があります。初めの話に戻ると、誰かの車に乗せてもらうのではなく、自分で目的地に向かっている車を運転する者のような記憶する目的意識と動機を持たなければなりません。

子どもたちが学習する上で大切なことは、誰かの車に乗せてもらい、目的地までは人任せということではなく、自らが運転し、道に迷ったり、間違ったりしながらも目的地にまでたどり着くというような学習スタイルが重要になります。つまり、学習する子どもたちが「学習させられている」という意識から「自分から進んで学習している」という意識を持たせることが大切です。そのためには、学習の目的達成に至るまでの過程において、子どもたちが自分の考えを表出すること、他の考えを理解すること、他と自分の考えを比較検討し最終的な自分の考えを自己決定することなどの学習の仕方が大切となります。

これからの変化の激しい時代をたくましく生き抜き、未来を切り拓いていくことができるために、学習の必要性を受け止めることができる子どもたち、常に目的意識を持ち続けようとする子どもたちを育てていきたいものです。